

次世代に繋ぐ林業講演会&山の恵みを利用したミニ門松造り（石川県）

事業の目的

林業後継者育成を目的として、実際に山に入って作業を行う女性林業者、20代の若さで頑張っている体験や学んだこと、これからの林業に対する思い、森づくり、人づくりにどう繋げていこうとしているのかの話聞く。また、女性に人気の門松造りを通して由来や何故その植物を使うのかを学ぶ。2つの事業をとおして、参加者のネットワークの強化を図る。

事業の内容

次世代に繋ぐ林業講演会

Iターンで地元森林組合に就業し、現場で働いている女性林業者に、町の林業の現在と今後について、講演いただいた。

講演は「長期的な視点での森林ビジョンが必要では」と、次の言葉でまとめられた。

森林づくりは、100年単位以上の視点を持って行っていく必要がある。これまでと同じく、縦に根が伸びる針葉樹の人工林を育てていくのか。それとも、横に根が伸び、腐葉土になる広葉樹も増やしていくのか。良い"土壌"を育てていくことも視野に入れた森づくりを行っていくことが、後世にとって良い森ではないだろうか。文化を守るため、里川海を守るための"森"づくりは何かを問いたい。経済もちろん大事であるが、人だけではなく、動植物の住処となる森づくり、人が減っていることがわかる中で、手のかかる森をどれだけ残すか。様々な問いがある中で、各地域によって状況は異なってくる。森林環境譲与税の使い方も問いの一つになるかと思われる。それぞれのまちで、そのまちの森林づくりの考え方の軸となるビジョンを持つことが必要では。そのためには、地域全体を見渡して、地域の森林を管理するための専門職員を役所に配置することも必要になるのではないだろうか。

山の恵みを利用したミニ門松造り

お正月とは本来神様が地上に降りてくる日。門松は神様が私達の家へ降りてくる時の目印になる。山の木々、自然の恵みを材料に、講師を迎えて門松を製作した。

ミニ門松に使う材料と語源

竹：人生の節目(七五三、成人式)

アテ（能登ヒバ）：邪気を払う

ウラジロ：夫婦共に自髪まで

五葉松：松は千歳と契り、生命力が強く常緑の葉が長寿や健康の象徴

松笠：子孫につなぐ

南天：（紅白）難を転じる

稲穂：「実るほど頭の垂れる稲穂かな」

梅：春の兆し

葉牡丹：幾重にも重なる葉が吉運と重なる。祝福

参加人数

20名

活動の様子



女性林業者(20代)による、町の林業の現在と今後についての講演



まず材料を山から採取し、門松名人からミニ門松の制作について指導を受けた。



山の恵みを利用したミニ門松造りは女性に人気。

感想（能登森林組合職員・山口敦子氏による講座を聴いて思うこと）

・森林が大切だと思い、丹波から移住して数年、森林に対する姿勢と仕事に対する情熱は若さだけでなく見事なものである。

・以前に比べて森林組合の職員が劇的に減っている。確かに森林組合の存在は知っているが、内容は分からないし、自分には関係ない組織としてとらえていたが、今林研グループとしてお会いして話を聞かせてもらうようになり、ひょっとして自分にも放置されている山林を何とかできるのではないかと思うようになった。

・例えば、毎年シイタケ原木に菌入れさせてもらっているが、原木の切り出しに思わぬ苦勞があるという。ホームセンターに販売されているものは安いということだが、森林組合が選んで切り出したものはプロ意識に誇りを持って、良質をギリギリ価格で提供しているということを知る。

・先日、穴水学童保育園にて山口さんがスライドを見せて森林組合について語りかけた折には、子等は静かに聞いてくれ、シイタケの植菌もして、シイタケの出るのを楽しみにしてくれた。このように小さい頃に体験させることで、森林に興味を持つ人も出てくるはず。国土の大切な森林の育成、里山保全は将来の日本を背負う人達への生きた教育であり、もっと国策として取り組んで、軸となる森林組合を守り、地域に根ざした人材を守らねばならないし、魅力ある仕事をしていただきたい。それにより取り残された山林を生き返らせて、子や孫に譲る山林遺産が、現在負担となっているものが宝の山となり、喜びとなるべきである。